

紫紺染について

宮沢賢治

青空文庫

盛岡の産物のなかに、紫紺染というものがあります。

これは、紫紺といいう桔梗によく似た草の根を、灰で煮出して染めるのです。

南部の紫紺染は、昔は大へん名高いものだつたそうですが、明治になつてからは、西洋からやすいアニリン色素がどんどんはいつて来ましたので、一向はやらなくなつてしましました。それが、ごくちかごろ、またさわぎ出されました。けれどもなにぶん、しばらくすたれていたものですから、製法も染方も一向わかりませんでした。そこで県工業会の役員たちや、工芸学校の先生は、それについていろいろしらべました。そしてとうとう、すつかり昔のようないいものが出来るようになつて、東京大博覽会へも出ましたし、二等賞も取りました。ここまで、大てい誰でも知っています。新聞にも毎日出ていました。

ところが仲々、お役人の方の苦心は、新聞に出ているくらいのものではありませんでした。その研究中の一つのはなしです。

工芸学校の先生は、まず昔の古い記録に眼をつけたのでした。そして図書館の二階で、毎日黄いろに古びた写本をしらべているうちに、遂にこういういことを見附けま

した。

「一、山男、紫紺を売りて酒を買ひ候事、
 山男、西根山にて紫紺の根を掘り取り、夕景に至りて、ひそかに御城下（盛岡）
 へ立ち出で候上、材木町生薬商人、近江屋源八に一俵二十五文にて売り候。
 それより山男、酒屋半之助方へ参り、五合入程の瓢箪を差出し、この中に清酒
 一斗お入れなされたくと申し候。半之助方小僧、身ぶるえしつつ、酒一斗はとても入り兼か
 ね候と返答致し候処、山男、まずは入れなさるべく候と押して申し候。半之助も顔色青
 ざめ委細承知と早口に申し候。扱、小僧ますをとりて酒を入れ候に、酒は事もなく入り、
 遂に正味一斗と相成り候。山男大に笑いて二十五文を置き、瓢箪をさげて立ち去り候趣、
 材木町総代より御届け有之候。」

これを読んだとき、工芸学校の先生は、机を叩いて斯うひとりごとを言いました。

「なるほど、紫紺の職人はみな死んでしまつた。生薬屋のおやじも死んだと。そうし
 てみるとさしあたり、紫紺についての先輩は、今では山男だけとというわけだ。よしよし、
 一つ山男を呼び出して、聞いてみよう。」

そこで工芸学校の先生は、町の紫紺染研究会の人達と相談して、九月六日の

午後六時から、内丸西洋軒で山男の招待会をすることにきめました。そこで工芸学校の先生は、山男へ宛てて上手な手紙を書きました。山男がその手紙さえ見れば、きっともう出掛けたで来るよううまく書いたのです。そして桃いろの封筒へ入れて、岩手郡西根山、山男殿と上書きをして、三銭の切手をはつて、スポンと郵便函へ投げ込みました。

「ふん。こうさえしてしまえば、あとはむこうへ届くまいが、郵便屋の責任だ。」と先生はつぶやきました。

あつはつは。みなさん。どうとう九月六日になりました。夕方、紫紺染に熱心な人たちが、みんなで二十四人、内丸西洋軒に集まりました。

もう食堂のしたくはすつかり出来て、扇風機はぶうぶうまわり、白いテーブル掛けは波をたてます。テーブルの上には、緑や黒の植木の鉢が立派にならび、極上等のパンやバターももう置かれました。台所の方からは、いい匂がふんふんします。みんなは、蚕種取締所設置の運動のことやなにか、いろいろ話し合いましたが、ころのなかでは誰もみんな、山男がほんとうにやつて来るかどうかを、大へん心配していました。もし山男が来なかつたら、仕方ないからみんなの懇親会ということにしようと、

めいめい考えていました。

ところが山男が、とうとうやつてきました。丁度、六時十五分前に一台の人力車がすうつと西洋軒の玄関にとまりました。みんなはそれ来たつと玄関にならんでむかえました。俾屋はまるでまつかになつて汗をたらしゆげをほうほうあげながら膝かけを取りました。するとゆつくりと俾から降りて来たのは黄金色目玉あかつらの西根山の山男でした。せなかに大きな桔梗の紋のついた夜具をのつしりと着込んで鼠色の袋のような袴をどふつとはいておりました。そして大きな青い縞の財布を出して、

「くるまちんはいくら。」とききました。

俾屋はもう疲れてよろよろ倒れそうになつていましたがやつとのことで斯う云いました。
「旦那さん。百八十両やつて下さい。俾はもうみしみし云つていますし私はこれから病院へはります。」

すると山男は、

「うんもつともだ。さあこれだけやろう。つりは酒代だ。」と云いながらいくらだかわけのわからない大きな札を一枚出してすたすた玄関にのぼりました。みんなはあつとおじぎをしました。山男もしづかにおじぎを返しながら、

「いや、こんにちは。お招きにあずかりまして大へん恐縮です。」と云いました。みんなは山男があんまり紳士風で立派なのですつかり愕ろいてしました。ただひとりその中に町はずれの本屋の主人が居ましたが山男の無暗にしか爪らしいのを見て思わずやりとしました。それは昨日の夕方顔のまつかな蓑を着た大きな男が来て「知つて置くべき日常の作法。」という本を買って行つたのでしたが山男がその男にそつくりだつたのです。

とにかくみんなは山男をすぐ食堂に案内しました。そして一緒にこしかけました。山男が腰かけた時椅子はがりがりつと鳴りました。山男は腰かけるとこんどは黄金色の目玉を据えてじつとパンや塩やバターを見つめ「以下原稿一枚?なし」

どうしてかと云うともし山男が洋行したとするとやつぱり船に乗らなければならぬ、山男が船に乗つて上海に寄つたりするのはあんまりおかしいと会長さんは考えたのでした。

さてだんだん食事が進んではなしもはづみました。

「いやじつさいあの辺はひどい処だよ。どうも六百からの棄権ですからな。」

なんて云つてゐる人もあり一方ではそろそろ大切な用談ようだんがはじまりかけました。

「ええと、失礼しつれいですが山男さん、あなたはおいくつでいらつしやいますか。」

「三十九です。」

「お若いわかですな。やはり一年は三百六十五日ですか。」

「一年は三百六十五日のときも三百六十六日のときもあります。」

「あなたはふだんどんなものをおあがりになりますか。」

「さよう。栗くりの実みやわらびや野菜やさいです。」

「野菜はあなたがおつくりになるのですか。」

「お日さまがおつくりになるのです。」

「どんなのですか。」

「さよう。みず、ほうな、しじけ、うど、そのほか、しめじ、きんたけなどです。」

「今年はうどの出来がどうですか。」

「なかなかいいようですが、少しかおりが不足ふそくですな。」

「雨の関係かんけいでしようかな。」

「そうです。しかしどうしてもアスパラガスには叶かないませんな。」

「へえ」

「アスパラガスやちしやのようなものが山野に自生するようにならないと 産業もほんとうではありませんな。」

「へえ。ずいぶんなご卓見たっけんです。しかしあなたは紫紺しづんのことはよくぞんじでしような。」

みんなはしいんとなりました。これが今夜の眼がん目めだつたのです。山男はお酒さけをかぶりと呑んで云いました。

「しこん、しこんと。はてな聞いたようなことだが、どうもよくわかりません。やはり知らないのですな。」みんなはがつかりしてしまいました。なんだ、紫紺のことも知らない山男など一向用はないこんなやつに酒さけを呑ませたりしてつまらないことをした。もうあとはおれたちの懇親会こんしんかいだ、と云うつもりでめいめい勝手かつてにのんで勝手にたべました。ところが山男にはそれが大へんうれしかつたようでした。しきりにかぶりかぶりとお酒さけをのみました。お魚さかなが出ると丸まるごとけろりとたべました。野菜やさいが出ると手をふところに入れたまま舌だけ出してべろりとなめてしまします。

そして眼まなこをまつかにして「へろれつて、へろれつて、けろれつて、へろれつて。」なん

て途方もない声で咆えはじめました。さあみんなはだんだん氣味悪くなりました。おまけに給仕がテーブルのはじの方で新らしいお酒の瓶を抜いたときなどは山男は手を長くながくのばして横から取つてしまつてラッパ呑みをはじめましたのでぶるぶるふるえ出した人もありました。そこで研究会の会長さんは元来おさむらいでしたから考えました。（これはどうもいかん。けしからん。こうみだれてしまつては仕方がない。一つひきしめてやろう。）くだもの出たのを合図に会長さんは立ちあがりました。けれども会長さんももうへろへろ酔つていたのです。

「ええ一寸一言」挨拶申しあげます。今晚はお客様にはよくおいで下さいました。どうかおゆるりとおくつろぎ下さい。さて現今世界の大勢を見るに實にどうもこんらんしている。ひとのものを横合からとるようなことが多い。實にふんがいにたえない。まだ世界は野蛮からぬけない。けしからん。くそつ。ちよつ。」

会長さんはまつかになつてどなりました。みんなはびっくりしてぱくぱく会長さんの袖を引つぱつて無理に座らせました。

すると山男は面倒臭そうにふところから手を出して立ちあがりました。「ええ一寸一言」挨拶を申し上げます。今晚はあついおもてなしにあずかりまして千萬かたじけ

なく思います。どういうわけでこんなおもてなしにあずかるのか先刻からしきりに考えているのです。やはりどうもその先頃おたずねにあずかつた紫紺についてのようであります。そうしてみると私も本気で考え出さなければなりません。そう思つて一生懸命に思い出しました。ところが私は子供のとき母が乳がなくて濁り酒で育ててもらつたためにひどいアルコール中毒のあります。お酒を呑まないと物を忘れるので丁度みなさまの反対であります。そのためについビールも一本失礼いたしました。そしてそのお蔭でやつとおもいだしました。あれは現今西根山にはたくさんございます。私のおやじなどはしじゅうあれを掘つて町へ来て売つてお酒にかえたというはなしであります。おやじがどうもちかごろ紫紺も買う人はなし困つたと云つてこぼしているのも聞いたことがあります。それからあれを染めるには何でも黒いしめつた土をつかうというはなしもぼんやりおぼえています。紫紺についてわたくしの知つているのはこれだけであります。それで何かのご参考になればまことにしあわせです。さて考えてみますとありがたいはなしでござります。私のおやじは紫紺の根を掘つて来てお酒ととりかえましたが私は紫紺のはなしを一寸すればこんなに酔うくらいまでお酒が呑めるのです。

そらこんなに酔うくらいです。」

山男は赤くなつた顔を一つ右手でしごいて席へ座りました。

みんなはざわざわしました。工芸学校の先生は「黒いしめつた土を使ふこと」と手帳うへ書いてポケットにしました。

そこでみんなは青いりんごの皮をむきはじめました。山男もむいてたべました。そして実をすつかりたべてからこんどはかまどをぱくりとたべました。それからちよつとそばをたべるような風にして皮もたべました。工芸学校の先生はちらつとそれを見ましたが知らないふりをしておりました。

さてだんだん夜も更けましたので会長さんが立つて、

「やあこれで解散だ。諸君めでたしめでたし。ワツハツハ。」とやつて会は終りました。

そこで山男は顔をまつかにして肩をゆすつて一度にはしごだんを四つくらいずつ飛んで玄関へ降りて行きました。

みんなが見送ろうとあとをついて玄関まで行つたときは山男はもう居ませんでした。

丁度七つの森の一番はじめの森に片脚をかけたところだつたのです。

さて紫紺染が東京大博覧会で二等賞をとるまでにはこんな苦心もあつたという

だけのおはなしであります。

青空文庫情報

底本：「ポラーノの広場」角川文庫、角川書店

1996（平成8）年6月25日初版発行

底本の親本：「新校本 宮澤賢治全集」筑摩書房

1995（平成7）年7月5日～

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年5月12日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

紫紺染について

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>